

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

東京ニューシティ管弦楽団

第35回定期演奏会

ベートーヴェン新版シリーズ Vol.4

(新ブライトコップ版によるベートーヴェン交響曲チクルス)

Ludwig
van
Beethoven

2004年4月24日(土) 18:30開演(開場18:00)

東京芸術劇場大ホール
TOKYO METROPOLITAN ART SPACE

主催:東京ニューシティ管弦楽団



業種を超えて、グループのチカラを結集。新たな都市環境の創造を目指します。

企業や業種の枠を超え、私たち三井不動産グループは、
それぞれの子カラを結集し新たな価値にあふれた都市づくり、街づくりを目指します。
その決意を「都市に豊かさと潤いを 私たち三井不動産グループは常にベストを提供します」というグループステートメントに込めました。
お客様ひとりひとりの満足のために、常にベストの財、情報、サービスを提供する三井不動産グループ。
どうぞ、これからの私たちにご期待ください。

都市に豊かさと潤いを

私たち三井不動産グループは常にベストを提供します

 **三井不動産グループ**
<http://www.mitsuifudosan.co.jp/>

三井不動産販売 三井ホーム エム・エフ・ビルマネジメント関西 ガーデンホテルズ キャニオン 第一園芸
第一整備 三井デザインテック 三井の森 三井不動産住宅サービス 三井不動産住宅サービス関西
三井不動産住宅リース 三井不動産ビルマネジメント ユニリビング ららぽーと

PROGRAM

ベートーヴェン(1770~1827)

Ludwig van Beethoven

序曲「献堂式」 作品124 (ヘンレ版)

“The Consecration of the House” overture Op.124 (G.Henle Verlag)

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品61 (ヘンレ版)

Violin Concerto in D major Op.61 (G.Henle Verlag)

ヴァイオリン:瀬川 祥子

Violin:Sachiko Segawa

I Allegro ma non troppo

II Larghetto

III Rondo

— intermission —

交響曲第5番 ハ短調 作品67「運命」

(新ブライトコップ版)

Symphony No.5 in C minor Op.67

(1996 by Breitkopf & Hartel)

I Allegro con brio

II Andante con moto

III Allegro

IV Allegro

ブライトコップ新版使用によるベートーヴェン交響曲チクルス(日本初)-III [内藤 彰]

| ブライトコップ新版について |

新版についての一般的概論は、第32回定期演奏会(9/25)のプログラムに詳しく記しました。(ご興味のおありの方は、ホームページをご覧ください。今日、一階客席ロビーの次回公演チケット販売所にて、そのコピーをお持ちください。) 今回の第5番も基本的に同じコンセプトで考えられ、主な修正点は、●アーティキュレーション(スラーがどこからどこまでかかるか等) ●ダイナミクス(*f*や*p*等) ●各種発想記号(アクセント、スフォルツァンド、スタッカート、テヌート等)の各パート間、あるいは曲の構造上の同一パターン他における矛盾点(当然同じパターンであるはずのところかミス?のためか違っている)の修正、等々従来の旧版を使用していた時も、指揮者の判断により適宜さまざまに修正されつつ演奏されてきたパターンが多くを占めています。以下に比較的大切な新版による変更点を、小節番号でお示いたします。(楽譜をお持ちの方にしかわかっていただけだけでなく、しかも専門的になってしまい申し訳ございません。)

一楽章

- 240小節:チェロ、バスの1拍目は*f*1つ(今までは*ff*)で、その裏拍から*ff*になる。⇒今までより大切なモチーフがよりはっきり聞こえる。
- 282~286小節:ホルン・トランペット・ティンパニーのパートは、すべて全体符だったものが、全小節に、木管楽器やチェロ・バスと同様の、*sf*付き4分音符が加えられた。⇒今まで287小節のみ*sf*付き4分符が唐突に書かれていることがこの楽章の特徴の一つとされていたが、この訂正により単なる間違いのなせる、いたずらだった事がわかり、結果、通常のベートーヴェンの特色どおり、同じモチーフを積み重ね(この場合6小節)ピークを築き上げるという典型的なパターンに落ち着いた。しかし提示部における同様箇所訂正はなされておらず、依然として曖昧さは払拭されていない。
- 374~381小節:弦楽器群と管打楽器群が2小節毎交互に同じモチーフを演奏する場面で、弦楽器群にのみ付けられていた*sf*記号が、管打楽器群にも同様に付けられた。⇒モチーフの交互の掛け合いがより鮮明に表現され得る。
- 396~438小節:すべてのパートが*f*1つに統一された。また必要な随所に*sf*記号が付加された(ベートーヴェン自身は付けていなくても意図が明らかと思われる箇所すべてに)。⇒今までパートにより無意味に*ff*のままであったり、*f*1つであったりしたものが整理され、テーマがはっきりすると共に、ダイナミクスの変化を利用して演奏上の構成がしやすくなる。

二楽章

- 30,79小節:1拍目はすべてのパートにスタッカートなし。⇒今までパートにより曖昧であったが、これによりアーティキュレーション(フレーズの中での分節の仕方等)が統一され、正しい演奏法(フレージング)が確定される。
- 127~130小節:スラーの位置が変わり、アーティキュレーションが変わる。
- 132~133小節:クレッシェンド、デクレッシェンドの位置がずれている。⇒フレーズのピークの位置がずれる。

三楽章

- 236小節:この楽章は3部形式になっている。その中間部(トリオ)が終わった部分で、そのまま第3部に進むのが通常であったが、この版では、ダ・カーボ(曲頭に戻る)が付け加えられているため(標記上は繰り返し記号になっている)、もう1度曲の初めに戻って同じことを繰り返した後、第3部に進むようになっている。
- 356小節~:ヴァイオリンIのパートのフレージング(スラーのかけ方)が訂正されている。

四楽章

- 122小節:*più f*(より強く)の位置が1拍または1小節変更された。⇒これによりフレーズの終わりどまりの場所が1小節ずれ、その結果、旋律そのものの捉え方も変わってくる。
- 192~206小節:木管のスラーの位置が版により違う。⇒フレーズの歌い方が変わる。
- 232~233,240~248小節等:スラーの付け方が変わった。⇒イメージが大きく変わる。
- 319,336小節:今回の1番大きな変更点である。今までは、ファゴットがソドソミレドソーと奏した後、同じ旋律をホルンが最初の音だけミに変え、1オクターヴ高い音程でエコーのように弱音で奏してきた。⇒本日は、ホルンも最初の音を変更せず、全く同じ旋律を1オクターヴ高くエコーとして奏します。おそらくベートーヴェン自身によって、または当時の写譜した人、ないしは指揮者等によって、五線のうち一本ずれて?記譜され(その結果ソとミが入れ替わる)、しかもそれが上記の誰かによって直されるなど新版の基になる資料が混乱しており、後世の人にはどちらが正しいのか判断できない状況になっている(当時の総譜、パート譜等にはそれぞれどちらかが採られていた。しかし、今まで最もよく使われてきた旧版はミのみを採用していたため、世界中のオーケストラはそれに従ってきた)。この新版には、その両方が示され、どちらを選択するかは、指揮者の良識に任されるようになっている。

| 演奏法について(主に第33回のプログラムからの転記) |

一般オーケストラにおける古典奏法に関しましても、前回(9/25)のプログラムに書かせていただきました。弦楽器群は、独特の弓使いでヴィブラート奏法を極力使わず、管楽器群も含め、全体に軽い快活な響きを基軸とする、当時主流の演奏法のごとく、多くの場合この流れを汲む奏法でのみ、作曲家の(今回はベートーヴェンの)希望するテンポと発想記号を、彼らの意図どおりに再現することが可能になります。本日の演奏では、20世紀の遺物的とも言える奏法(古典派の曲を演奏する時も大編成で、ロマン派の曲の奏法との違いをあまり意識しない演奏法で、本来の古典派音楽の音色と比べ、重く、厚ぼったい。少なくともなりつつあるとは言え、現在もいまだ主流の地位を死守しているこの奏法では、当時の作曲家のイメージした響きとは異なる音楽表現になりやすい)ではどうしても表出できなかった、ベートーヴェンの意図したであろう演奏表現に近づくため、指定のテンポや指示を、できる限り守り、モダンオーケストラとして当時の奏法を可能な限り取り入れた演奏をしたいと思っております。聴き慣れたイメージと異なる表現方法に戸惑われる箇所があるかもしれませんが、できましたら、今までの先入観を持たれずにお聴きいただけると幸いです。

Profile



内藤 彰 (指揮) AKIRA NAITO (Conductor)

名古屋大学理学部卒業。在学中より指揮を山田一雄氏に師事する。桐朋学園大学研究科(指揮専攻)にて、小澤征爾氏、秋山和慶氏、尾高忠明氏他に師事し、修了後(社)山形交響楽団の専属指揮者を3年間務める。これまでに新日本フィル、東フィル、東響、新星日響、シティ・フィル、神奈川フィル、名フィル、九響他、日本の多くの主要オーケストラを指揮してきた。シンフォニーはもちろん、オペラ・バレエの分野でも、その音楽性とテクニックは聴衆の心からの共感と、共演者の絶大な信頼を得ている。

海外では、1991年旧ユーゴスラヴィア国立ベオグラードフィルハーモニーを指揮。1992年には、モスクワ音楽院大ホールにて、モスクワ交響楽団を指揮し、最初のステージから満員の聴衆より5度のカーテンコールを受け、多くの楽員たちからもロシア音楽の魂を日本人から教えられたと絶賛された。1996年5月、ロシアの国立ヴァローニッシュ歌劇場にて、『セヴィリアの理髪師』を、1997年5月には、ベラルーシ国立歌劇場にて『蝶々夫人』を指揮し、その成功により、同歌劇場から定期的な客演が要請されている。また2001年3月のサンクトペテルブルグ・カペラ交響楽団、2002年5月ロシア国立ウリヤノフスク・アカデミー交響楽団に客演、新聞各紙に大きく取り上げられ、絶大な賛辞が送られた。2001年12月には北ハンガリー交響楽団を、2002年7月にはミラノスカラ座フィルハーモニーのメンバーを中心とする州立ロンバルディア室内管弦楽団の北イタリアツアーを、2003年3月にはメキシコ州立交響楽団を指揮。

2004年1月に行なわれた歌劇『蝶々夫人』の公演にて、作曲家プッチーニの強い願いにもかかわらず初演以来一度も使われてこなかった、本来決まった音程を持たない日本の伝統的「かね類」(寺の釣鐘の音、寺で僧侶が経を読みながら叩く大きなお椀型のキン、風鈴他)に、12音の音程を持たせ「楽器」として特注制作、それにより作曲者の願う本当の『蝶々夫人』を世界初演し、各方面から驚きと絶大な賛辞を得た。これにより今まで知られていなかったプッチーニの大切な意図の数々が初めて明らかにされるなど、日本人の指揮者として、世界のオペラ界への貢献はきわめて大きい。すでに海外での指揮や「楽器」使用の話が進み始め、これを機会に、正しい『蝶々夫人』の演奏は世界中に広く普及していくであろう。現在東京ニューシティ管弦楽団と共に、日本で初のブライトコップ新版によるベートーヴェン交響曲チクルスを継続中である。新版と各種版との違いとその意義、そして、モダンオーケストラとしての古典奏法の取り入れ方にまで言及したプログラムノートはその画期的な企画と共に好評を博している。現在、東京ニューシティ管弦楽団、及びプロ混声合唱団「東京合唱協会」音楽監督・常任指揮者、日本指揮者協会幹事。



瀬川 祥子 (ヴァイオリン) SACHIKO SEGAWA (Violin)

東京生まれ。4歳からヴァイオリンをはじめ、故鷺見三郎氏、小林健次氏、江藤俊哉氏に師事。1978年毎日新聞社主催、全日本学生音楽コンクール第1位入賞。1986年桐朋学園女子高等学校音楽科を首席で卒業、同大学ディプロマコース入学。第3回日本国際音楽コンクール奨励賞受賞。1987年チューリッヒにおいてナタン・ミュルシュタイン氏のマスタークラスに参加。その後モスクワ音楽院、ザールブリュッケン音楽大学、パリ国立音楽院第三課程他で学ぶ。ベルリン芸術大学大学院を卒業し、国家演奏家資格を取得。

1988年イタリア、ヴィオッティ国際音楽コンクール最高位受賞。ワレリー・クリモフ氏、レジス・バスキエ氏、トーマス・ブランディス氏に師事。今までに、モスクワ・フィル、モスクワ響、ジョルジュ・デュマ響(ルーマニア)、メキシコ州立管弦楽団他と共演。また、ロシア、フランス、ルーマニア、ポルトガル、インド、東京、大阪などでリサイタルを行なう等のソロ活動の他、室内楽奏者としても欧州各地で活動中。2001年、フォンテックよりイザイ無伴奏ソナタ全曲をリリース。



東京ニューシティ管弦楽団 TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

東京ニューシティ管弦楽団は、1990年、音楽監督・常任指揮者に内藤彰を擁し設立された。定期演奏会の他、名曲コンサート、オペラ・バレエとの共演、音楽鑑賞教室、レコーディングなど幅広く活躍。定期演奏会は、現在年5回行なわれ、内外の実力のあるアーティストを迎えている他、定期的に行なっているプロ混声合唱団・東京合唱協会との

ジョイントでは宗教曲、オペラハイライト等毎回意欲的な内容を披露し、その高い完成度は注目を集めている。

オペラの分野では特に評価が高く、二期会、藤原歌劇団のオペラ公演の他、レナター・スコット、アルフレード・クラウス、ヘルマン・ブライ、ルチアーノ・パヴァロッティ、カルロ・ベルゴンツィ、ファン・ディエゴ・フロレス、アグネス・バルツァ、等世界で活躍するオペラ歌手との共演も数多く、聴衆や批評家のみならず、世界の著名オーケストラと共演している彼らからも、心からの絶賛の言葉を贈られている。バレエの分野では、国内の主要バレエ団の他、英国バーミンガム・ロイヤルバレエ団、ミラノスカラ座バレエ団、シュトゥットガルトバレエ団、モンテカルロバレエ団、ロシア国立レニングラードバレエ団等海外からのバレエ団の日本公演にもこれまで数多く出演し、公演をサポートする誠実で質の高い演奏が毎回非常に高い信頼と評価を得ている。また、桂三枝、三枝成彰、中島啓江、ケント・ギルバート、マリ・クリスティーン等を迎えてのファミリーコンサートも、大変評判がよく、多くの方々から親しまれている。

Members

東京ニューシティ管弦楽団

音楽監督・常任指揮者	内藤 彰
指揮者	平井 秀明
マネージング・ディレクター	渡部 中子
コンサートマスター	藤田 めぐみ
インスペクター	金岡 秀典、山川 奈緒子
ライブラリアン	古市 尚子
事務局	渡辺 晶子、鈴木 光子、渋谷 明子、今井 久美子、青木 勝弘

1st Violins	山本 佳子	Violoncellos	名越 篤	下田 太郎
○藤田 めぐみ	岡田 邦子	○齋藤 章一	Oboes	源 真理
富山 ゆりえ	荒巻 泉	橋本 しのぶ	徳田 振作	Trumpets
吉井 孝子	高階 久美子	大島 純	井上 恵子	中西 清一
鈴木 順子	栗原 りか	葛西 英一	Clarinet	小林 史尚
山川 奈緒子	大竹 奏	望月 直哉	西尾 郁子	Trombones
中川 さと子		松 稜	小山 裕子	大川 真紀夫
森園 ゆり	Violas	Double Basses	Bassoons	伊藤 吉隆
影山 優子	○桜井 多美子	○飯田 克哲	藤田 旬	Bass Trombone
遠藤 雄一	宇佐美 久恵	鷺見 精一	齋藤 美和子	恵藤 康充
迫田 信子	安達 いづみ	石川 仁	Double Bassoon	Timpani
2nd Violins	堀江 冬子	江上 靖	井上 直哉	藤城 佳之
○上原 まさみ	久郷 寿実子	Flutes	Horns	Stage managers
山江 洋子	高瀬 有美	井ノ上 洋	小川 正毅	廣瀬 雷光
		丸田 悠太	松浦 光男	金岡 秀典

東京ニューシティ管弦楽団2004年度定期演奏会

音楽監督・常任指揮者 内藤 彰

■第36回定期演奏会(ベートーヴェン新版シリーズV)

2004年7月14日(水) 19:00~ 東京芸術劇場(大)
指揮 本名 徹次 ピアノ アンドレイ・ピサレフ
ベートーヴェン:「レオノーレ」序曲第2番
:ピアノ協奏曲第2番
:交響曲第8番

■第37回定期演奏会

<新発見・ブルックナー自身による改訂版/>
アダージョ楽章 世界初演>
2004年9月4日(土) 18:30~ 東京芸術劇場(大)
指揮 内藤 彰
ブルックナー:交響曲第8番

■第38回定期演奏会<ベートーヴェン新版シリーズVI>

2004年12月3日(金) 19:00~ すみだトリフォニーホール(大)
指揮 アグネス・グロスマン ピアノ リチャード・レイモンド
ヴァイオリン アンヌ・ロベール チェロ ペノワ・ロワゼール
ベートーヴェン:「フィデリオ」序曲
:三重協奏曲
:交響曲第7番(ブライトコップ新版)

■第39回定期演奏会

(東京合唱協会第20回定期演奏会)
2005年3月13日(日) 北とびあ さくらホール
指揮 内藤 彰 合唱・独唱 東京合唱協会

お問い合わせ
お申し込み

東京ニューシティ管弦楽団事務局
Tel:03-5933-3222

〒178-0063 東京都練馬区東大泉3-22-15-2F
Fax:03-6766-3782
http://www2.plala.or.jp/newcity/

●団体割引・セット券割引については事務局にお問い合わせください。
●やむを得ぬ事情により、出演者、曲目等が変更になる場合がございます。何卒ご了承ください。